

第4回 神戸大学受験生用 予想問題  
デジタル記憶と「忘れる権利」

---

【解答】

問1 A=エ B=イ C=ア D=ウ

問2 支持者たちは、この権利が、人々が過去の行動や意見によって永久に判断されることから守る可能性があると考えている。

問3 情報が本来の文脈から切り離されること。

問4 これは、個人が変わることの価値と、共有される歴史的記憶の重要性の両方を認める規則を必要とするかもしれない。

問5 ア・ウ

---

【本文全訳】

かつて、忘れることは人間生活の自然な一部であった。人々は重要な出来事を覚えているかもしれないが、多くの小さな失敗、不注意な発言、恥ずかしい瞬間は、次第に社会の記憶から消えていった。しかし今日、デジタル技術がこの状況を変えている。写真、メッセージ、コメントは、それを投稿した人々が変わった後でさえ、何年もオンライン上に残り続けることがある。検索エンジンやソーシャルメディアは、古い情報が再び見つけられ、共有されることを容易にしている。その結果、一部の人は、個人には「忘れられる権利」、つまり特定の個人情報をインターネットから削除するよう求める権利があるべきだと主張している。支持者たちは、この権利が、人々が過去の行動や意見によって永久に判断されることから守る可能性があると考えている。

この考え方は、プライバシーに関する議論において特に重要になっている。十代のころに未熟な発言をした人が、後になって、それが大学出願や就職の機会に影響を与えることに気づくかもしれない。かつて軽微な法的問題に関わった人が、その問題が解決しただと後になっても社会的損

害を受け続けることもある。忘れられる権利の支持者たちは、人々は成長し、変化し、人生を立て直すことを認められるべきだと主張している。また彼らは、オンライン上の情報はしばしば本来の文脈から切り離されると指摘している。これが起こると、それは人の性格について不公平なイメージを作り出す可能性がある。この意味で、忘れることは単に記憶の弱さではなく、人々が過去を乗り越えることを可能にする社会的機能なのである。

しかし批判者たちは、インターネットから情報を削除することが重大な問題を生み出す可能性があることを警告している。公人、企業、政府が、市民が知る正当な利益を持つ事実を隠そうとするかもしれない。ジャーナリストや歴史家もまた、デジタル情報に対する過度な管理が表現の自由を弱め、公的記録をゆがめる可能性があることを懸念している。さらに、情報が私的なものなのか、時代遅れなのか、それともなお社会的に重要なのかを誰が判断すべきかは、必ずしも明らかではない。もしこの判断が完全にテクノロジー企業に委ねられれば、彼らは公共の知識に対してあまりにも大きな力を持つかもしれない。それにもかかわらず、多くの専門家は、中心的な問題はデジタル情報が永遠に保存されるべきかどうかではなく、社会がどのようにしてプライバシーと人々の知る権利とのバランスを取ることができるかだと考えている。これは、個人が変わることの価値と、共有される歴史的記憶の重要性の両方を認める規則を必要とするかもしれない。

---

問1 空所補充

A=エ memory

該当箇所:

many small mistakes gradually disappeared from public ( A ).

## 2026 年度対応 神戸大学予想問題

public memory で「社会の記憶」「公的な記憶」という意味です。

本文冒頭では、昔は小さな失敗や恥ずかしい出来事が社会の記憶から自然に消えていった、という流れです。

---

B=イ forgotten

該当箇所:

individuals should have a “right to be ( B ).”

the right to be forgotten は「忘れられる権利」という表現です。

to be forgotten は受動態の不定詞で、「忘れられること」という意味になります。

---

C=ア context

該当箇所:

information online is often removed from its original ( C ).

be removed from its original context で「本来の文脈から切り離される」という意味です。

発言や出来事がもとの状況から切り離されると、誤った印象を与える可能性があります。

---

D=ウ expression

該当箇所:

too much control over digital information could weaken freedom of ( D ).

freedom of expression で「表現の自由」です。

情報削除が広がりすぎると、表現の自由や公的記録が損なわれる可能性がある、という批判者側の主張です。

---

問 2 下線部(1) 和訳

模範訳

支持者たちは、この権利が、人々が過去の行動や意見によって永久に判断されることから守る可能性があると考えている。

文法・構文解説

英文:

Supporters believe that this right could protect people from being permanently judged by actions or opinions from their past.

骨格は、Supporters believe that S could protect A from B.

- believe that SV:「～だと考える」
- this right:「この権利」=忘れられる権利
- protect A from B:「A を B から守る」
- being judged:動名詞の受動態で「判断されること」
- permanently:「永久に」
- by actions or opinions from their past:「過去の行動や意見によって」

特に from being judged は、前置詞 from の後ろに動名詞が来ている形です。

採点基準(6 点)

- 6 点:protect A from B, being judged の受動態, permanently, actions or opinions from their past を正確に訳している。
- 5 点:全体の意味は正確だが、一部表現がやや不自然。
- 4 点:過去の行動・意見による判断から守る、という大意は取れている。
- 3 点以下:protect A from B, 受動態, permanently の処理に大きな誤りがある。

---

問3 下線部(2) it の内容説明

模範解答

情報が本来の文脈から切り離されること。

解説

下線部(2)の it は、直前の内容を受けています。

直前には、

information online is often removed from its original context

とあります。

したがって it が指すのは、オンライン上の情報が本来の文脈から切り離されること です。

35字以内なので、情報が本来の文脈から切り離されること。とまとめるのが適切です。

採点基準(4点)

- 4点:「情報」と「本来の文脈から切り離されること」の両方が明確。
- 3点:「文脈から切り離されること」はあるが、情報の対象がやや不明。
- 2点:「情報が誤解されること」など、大意は近いが具体性不足。
- 1点:「オンライン情報の問題」など、抽象的すぎる。
- 0点:誤読・無解答。

---

問4 下線部(3) 和訳

模範訳

これは、個人が変わることの価値と、共有される歴史的記憶の重要性の両方を認める規則を必要とするかもしれない。

文法・構文解説

英文:

This may require rules that recognize both the value of personal change and the importance of shared historical memory.

骨格は、This may require rules that recognize both A and B.

- This:直前の「プライバシーと知る権利のバランスを取ることを受ける」
- require:「必要とする」
- rules that recognize ...:「～を認める規則」  
that は rules を修飾する関係代名詞
- both A and B:「AとBの両方」
- the value of personal change:「個人が変わることの価値」
- the importance of shared historical memory:「共有される歴史的記憶の重要性」

採点基準(8点)

- 8点:require, 関係代名詞 that, both A and B, personal change, shared historical memory を正確に処理。
- 6~7点:全体の意味は正確だが、一部表現がやや不自然。
- 4~5点:rules that recognize の修飾関係や both A and B が弱い、大意は取れている。
- 3点以下:文構造の把握が不十分、または大意がずれている。

---

問5 内容一致

正解

ア・ウ

(ア) 正しい

Supporters of the right to be forgotten believe that people should not continue to be judged mainly by old actions or opinions.

## 2026 年度対応 神戸大学予想問題

本文では、  
protect people from being  
permanently judged by actions or  
opinions from their past  
とあります。

「過去の行動や意見によって判断され続けることから人々を守る」という内容なので一致します。

(イ) 誤り

The passage suggests that online information tends to fade from public attention in the same way as ordinary human memories.

本文では、デジタル技術によって写真やコメントが何年もオンライン上に残り続けると述べています。

「普通の人間の記憶と同じように薄れていく」という内容ではありません。

(ウ) 正しい

Critics are concerned that removing information may allow powerful groups to hide facts that the public should know.

本文では、  
Public figures, companies, and governments might try to hide facts that citizens have a legitimate interest in knowing.  
とあります。

公人・企業・政府が、市民が知るべき事実を隠そうとする可能性がある、という内容なので一致します。

(エ) 誤り

The writer argues that decisions about removing online information should be left mainly to technology companies.

本文では、判断がテクノロジー企業に委ねられれば、公共の知識に対して大きすぎる力を持つ可能性があると述べています。

したがって、筆者がそれを勧めているわけではありません。

(オ) 誤り

The passage suggests that personal privacy is discussed separately from the public's interest in historical records.

本文では、プライバシーと知る権利、個人の変化と歴史的記憶のバランスを取ることが課題だと述べています。

「別々に議論される」とは逆です。

---

### 全体講評

今回の文章は、「忘れられる権利」をテーマに、デジタル社会における記憶・プライバシー・表現の自由のバランスを扱った神戸大型の説明文です。第1段落では問題提起、第2段落では権利を支持する理由、第3段落では批判と調整の必要性が述べられています。

文法面では、問1の right to be forgotten、問2の protect A from being Vp.p.、問4の rules that recognize both A and B が重要です。また、問3では it が直前の文内容全体を受けることを正確に捉える必要があります。神戸大学では、こうした指示語問題で「直前の名詞」ではなく「直前の内容」を問うことが多いため、文脈を丁寧に追うことが大切です。